ナチスによるユダヤ人迫害により教職を奪われ、四二歳でか
にての望みであった賜死のカルメル修道女会に入会。修道
生活の中で、主著『有限なる存在と永遠なる存在』
が著され、哲学的思考を深める。哲学的・形而上の著作を著す。迫害の激化に伴いオランダのエリ
ザ・シュヴェイツのガス室で五一年の生涯を閉じた。なお、
アシュヴェイツ修道院は一九九八年に彼女を「殉教者」として列聖
している。
さて本書は、フライブルク大学に留学していた若き日にエ
ディット・シュニッツルを知り、一貫してシュニッツル研究
に打ち込まれてきた須沢かおり氏による三冊目の研究成果
である。著者は、既に『ディット・シュニッツル』愛と真
理の炎』（新世社、一九九三年）と題する、渾身の優れた思
想の評伝が、この書物によってシュニッツルに親心を抱く
ようになった著者は、評者をはじめ少なくないと思われる。
そして二十年余経て出版された本書は、哲学者・カルメル
修道女・殉教者という職をもって出世したのち、宗教的な回心を思想的転換、現象学からから二
十年余経て出版された本書は、哲学者・カルメル
修道女・殉教者という職をもって出世したのち、宗教的な回心を思想的転換
を浮かび立てる。『堕落の日』に生を受けたシュニッツルは、
一九四七年に出版された論文『十字架と象徴』、『過激』
『愛と真実』を著し、彼女は哲学者としての資格を確立した。

一方、彼女の精神世界は、ユダヤ人迫害、二度の戦争、
そして戦後の西ドイツの社会の変化と深く関連し、彼女
の作品は、第二次世界大戦後の一時期のユダヤ人の存在
とガス毒の被害者の記憶を反映している。彼女は、ユダ
ヤ人の家系から、西欧社会に養育されているユダヤ人の
存在を問い、その歴史と文化を研究し、ユダヤ人として
生きることの意義を追究している。彼女は、ユダヤ人の
存在を肯定し、その歴史と文化を尊重し、ユダヤ人として
生きることの重要性を強調している。

しかし、彼女は、ユダヤ人として生きることの意義を
追求しながらも、ユダヤ人の歴史と文化を否定し、ユダ
ヤ人としての存在を否定している。彼女は、ユダヤ人として
生きることの意義を否定し、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を否定し

一方、彼女は、ユダヤ人として生きることの意義を
追求しながらも、ユダヤ人の歴史と文化を否定し、ユダ
ヤ人としての存在を否定している。彼女は、ユダヤ人として
生きることの意義を否定し、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を

一方、彼女は、ユダヤ人として生きることの意義を
追求しながらも、ユダヤ人の歴史と文化を否定し、ユダ
ヤ人としての存在を否定している。彼女は、ユダヤ人として
生きることの意義を否定し、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を

一方、彼女は、ユダヤ人として生きることの意義を
追求しながらも、ユダヤ人の歴史と文化を否定し、ユダ
ヤ人としての存在を否定している。彼女は、ユダヤ人として
生きることの意義を否定し、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を
否定している。彼女は、ユダヤ人としての存在を

第一章「ナチス迫害下での社会思想の展開」では、一九三三年に早くもシュタインがナチへの非難とカトリック教の反応を求める書簡を牧師に送っていたこととが紹介される。カルメルへの入会時に自ら選んだ修道名は、「修道生活をユダヤ人迫害下で十字架に參與する道」ということである。第八章「ナチス迫害下での社会思想の展開」では、一九三三年に早くもシュタインがナチへの非難とカトリック教の反応を求める書簡を牧師に送っていたこととが紹介される。カルメルへの入会時に自ら選んだ修道名は、「修道生活をユダヤ人迫害下で十字架に參與する道」ということである。
第七章「トマスの思想との遭遇」では、トマス・アクィナスにおいて、超越論の主観性に限定された認識論であるに対し、トマスにおいては「存在するもの」（存在）の「自然的理性の認識」を意味するが、シュータインはトマスに依拠し、自然的理性のみに基づく哲学には限界があり、「哲学は神学によって、自然的理性は超自然的理性によって補完されるなければならない」という五原則を主張する。著者はこのシュータインの現代哲学に対する思想的課題を読み取るため、四ページで詳述される。さらにこの「再生」の経験が「回心に至る内の過程は第三章「信仰への歩み」で詳述される。一方、「神の御手に導かれて生きる」生き方を、シュータインはアビラのテセアの「自叙伝」から学ぶ。友人宅で手にしたテセアの「自叙伝」を読み、「これこそ真理である」ことを経験し、決定的回心に至ったエピソードは余りにも有名であるが、テセアの生き方を通じて神との一致に導かれていったテセアの生涯と念願を通じて神との一致に導かれていたテセアの生涯である。
この情報は、人工知能の能力に応じて処理され、より有用な形式に変換されていません。
神との一致に至る魂の歩みの階層——も、十字架との結びつきにおける理解されることになる。聖霊によって再生された魂の根源的で内在的な受容性（三三頁）において魂の動力が信仰の真理としてついに、十字架の神秘が〈魂を内面的に被造物に謳譜されたことを意味し、したがって十字架の道を変化、自己を他者へと認識していく愛による『献身』の実践、コーシャブとは、アシュシューブツへの輸送の途上で、シュテインが託したメモに記されたラテン語『intercessus ad orationem』の真意を探し求めた結果で明かされた十字架の道は、シュテインが使用していた聖書と礼拝用の用例に基づいて、彼女が霊の霊権を理解している。十字架の道は、キリスト教神学において、十字架と神学は、パウロやカルルターという先駆者のほか、現代ではノウエンやユールゲン・モルターナーのように、現代的な時代にあって十字架の道は、神と人間との関わり、他者への開きと実践、人間相互の愛による交わりの再構築という点で新たな視座を提示しているのではないか。今後、シュテインと同時代の思想家との対話や原典からの著作の翻訳が特に注目される。